尾道商業会議所記念館
第9回企画展示

テーマ／尾道と石工

尾道と石工

「‥‥景色はいい処だった。寝ころんでいて色々な物が見えた。前の島に造船所がある。其処で朝からカーンカーンと金槌を響かせている。同じ島の左手の山の中腹に石切り場があって、松林の中で石切人足が絶えず唄を歌いながら石を切り出している。その声は市（まち）の遥か高い処を通って直接彼のいる処に聴えて来た。‥‥」と、これは、作家志賀直哉の名作「暗夜行路」の一節である。小説「暗夜行路」は、1921（大正10）年から1937（昭和12）年に発表された近代日本文学の代表作といわれており、主人公時任謙作が尾道ですごす一場面である。

尾道の特徴的な日常が、名作にも著されているように、尾道では、石材業も産業として盛んに行われていた。

石材の切り出し場としては、古くは市街地の背後、千光寺山や浄土寺山、対岸の向島であり、尾道は地質学的に花崗岩が多く、良質の石材にも恵まれていた。

尾道の繁栄は、1169（嘉応元）年に備後国大田庄の年貢米積出港の公認港に定められてから始まり、江戸時代の1672（寛文12）年に開かれた西廻り航路によって、尾道に北前船が寄港すると更に繁栄を極めた。北前船が、東北地方や北陸地方などの産物を運んできた後の、帰り荷として尾道の石材が積み込まれ、日本海沿岸に運ばれた。石材とともに尾道石工も各地に赴き、鳥居や灯篭をつくっていった。船底に石材を積むと船（千石船；北前船で使用されていた1000石以上の船）の安定にも一役買っていたという。

浄土寺には、1278（弘安元）年の納経塔、浄土寺山には、1332（元徳４）年の名号岩や不動明王像の磨崖仏などが残っている。また、豊臣秀吉が、1583（天正11）年に大阪城築城の折り、その命を受けた毛利氏が、尾道の山から採石して運んだ記事が、「尾道志稿」にしるされている。その中には、巨石に寄進大名の印が刻まれているということである。今でも、千光寺山や浄土寺山には、石を切り出した鑿（のみ）の跡が残っている。

毛利輝元（もうりてるもと）が、1591（天正19）年に広島城を築城の際には、尾道から石工数人を徴用して、広島市内に集団移住をさせた。その住まいしたところが、尾道町であった。石材の扱いや石細工など尾道石工の技術が優れていたということである。

尾道の石屋は、1627（寛永４）年の「尾道浦御加子地子銀掟御帳」によると、宮崎上新地一、同下町一、今市下町二、今市上町二、渡し場上町一の合計７軒のみとあるが、市内や近隣各地に尾道石工の手になる石造物が多くあり、それらの生産を考えあわせると石工集団が形成されていたと思われる。

浄土寺山の切り出し岩

浄土寺山の展望台近くに、巨岩群がそびえている。その中に鑿（のみ）跡のある巨岩があり、鑿で穴をこつこつと穿（うが）っていた跡がしのばれる。

また、千光寺山の鼓岩（つづみいわ）も岩の切り出し跡として知られている。

浄泉寺の天邪鬼（あまのじゃく）

浄泉寺の本堂にある２基の用水鉢（雨受盤）の下には、あわせて８体の天邪鬼の石造がある。雨水を受ける用水鉢（雨受盤）にまで押さえつけられている天邪鬼。意表をついた意匠と花崗岩を巧に彫りあげた尾道石工の技がある。天邪鬼は、1842（天保13）年に作られており、用水鉢（雨受盤）は、1939（昭和14）年に新しく作られたものである。古い用水鉢には、「石工新八 天保13年」とあり、天邪鬼も新八の手になるものと考えられる。

石屋町

久保一丁目と二丁目の境にある通称「石屋小路」や常称寺大門から東の地域は、いわゆる「石屋町」である。「石屋町」には、その名のとおり、石工が住んでいた。

江戸時代には、職種別居住が行われており、石工が住んでいた地域を、尾道町では「石屋町」と称していた。

1821（文政４）年の尾道町の町割地図には、石屋源三郎、石屋五郎兵ヱ、石屋助四郎、石屋嘉右ヱ門、石屋友八、石屋清三郎、石屋勘十郎などの名前がみえる。この地図には、虫喰い部分もあり全てがわからないが、石屋源三郎抱、石屋嘉右ヱ門抱、石屋清三郎抱の家も数軒あり、石工職人が住んでいたものと思われる。

石屋町は、昭和の中期まで続き、昭和初期には、石屋が40軒くらいあり、職人が70、80人おり、石屋組合もつくられていた。1930（昭和５）年くらいから徐々に仕事が少なくなり、1945（昭和20）年ころには、石屋が15、16軒になり、昭和30年代に入ると機械が導入され、切削や研磨を機械でおこなうようになり職人の数も減っていったということである。現在では、旧尾道町で営業しているものは一業者となった。

石屋小路

1821（文政４）年の尾道町の町割地図

佐渡宿根木白山神社の鳥居

佐渡の宿根木（現在の佐渡市宿根木）で大洪水があり、北前船の船主が犠牲者の弔い、災害再発防止を祈念するため尾道の石工与三郎に鳥居を造らせて寄進した。尾道の石工職人が北前船により、各地で活躍したことがうかがえる。

高御倉神社（石工神社）の由来

毎年、５月24日には、尾道市西久保町の久保八幡神社境内にある「高御倉神社（石工神社）」で、石工の祭りが行われている。

高御倉神社之由来書によると、「高御倉神社」は、江戸時代、享保年間に、摂津の国（現在の大阪府）の石工、福島村雲藤原徳栄が、尾道に移住し、尾道の石工連中に石工の祖先「石作ノ大連ノ公、建真利根命」をまつる神社を建立するよう発議し、尾道石工連中もこれに賛同して、1731（享保16）年２月吉日に京都新日吉神社から分祀して「石工の神」を勧請した。

新撰姓氏録によれば「石作ノ大連ノ公」は、垂仁天皇の御代に皇后日葉酢媛ノ命のために石の棺を作って献上し、その姓に「石作ノ大連ノ公」を賜ったといわれ、火ノ明ノ命の六世の孫、建真利根命が「石作ノ連」であるといわれている。

280年近くも祀り護られている社は、尾道石工の歴史を物語っている。

久保八幡神社境内にある高御倉神社

狛犬について

狛犬というと神社の境内に必ずと言ってよいほどよく目にする。今では、石造物の代表といってもよい。

狛犬とは何であろうか。狛犬は、神や仏を護る守護獣で、仏教とともにインドから伝来した。想像上の動物である。インドでは仏像の前に獅子、つまりライオン像が置かれていた。これが、中国を経て日本へ伝わると獅子と狛犬になった。
通常一対で造られるが、向かって右側が獅子、左側が狛犬となる。獅子は口を開け角はなし。狛犬は口を閉じ、角がある。口を開けているものは「阿形(あけい)」、口を閉じているものは「吽形(うんけい)」であり、寺の山門を守る仁王像の「阿吽(あうん)」などを取り入れたものと思われる。

守護獣は、祀られる対象が違えば、お稲荷さんでは狐であったり、山脇神社のように猿だったりする。
日本で最も古い狛犬は1190年～1199年(建久年間)に大仏修理の際に造られたとされる奈良東大寺南大門の狛犬といわれている。これは木像であるが、室町時代になると寺社の建物の外に造られるようになり、材質も石に移っていった。

尾道型の狛犬

狛犬にも作られた地域により形が違っている。ふくよかな体と愛嬌のある顔、長い毛の房が垂れ下がった尾をもつものが「江戸型」。顔を下げ、お尻を高く上げているのが「出雲型」である。体が大柄で肉付きもよく「阿形」は垂れ耳、「吽形」は立ち耳、尾は扇形のものが「筑後型」。そして、玉に乗った狛犬を見たことはないだろうか。これが、「尾道型」である。玉にのるか足をかけている他は顔つきや姿勢は自由に造られる。「尾道型」は、明治時代にブームを迎え、北九州から瀬戸内海沿岸にかけて分布している。

狛犬のような難しい造形を手がけることのできた石工は、特殊技能の持ち主であったといえる。「尾道型」を産みだした石工も高い技能を持った石工集団があったからこそ生まれたのであろう。

八坂神社の狛犬「吽形」

久保八幡神社の狛犬「阿形」

御袖天満宮の石段

御袖天満宮には、本殿に通ずる55段の石段がある。長さ5.2m、幅32cm、高さ17cmの一本ものの花崗岩を使っている。享保年中(1716年～1736年)につくられたといわれ、上から２段目は継いである。これは、一本のみ継ぐことで完璧の危うさを危惧した宗教的意味合いがあるのではないかといわれている。最上段は、単に割れたものである。夏に行われる祭りには、神輿がこの石段を登り降りする。

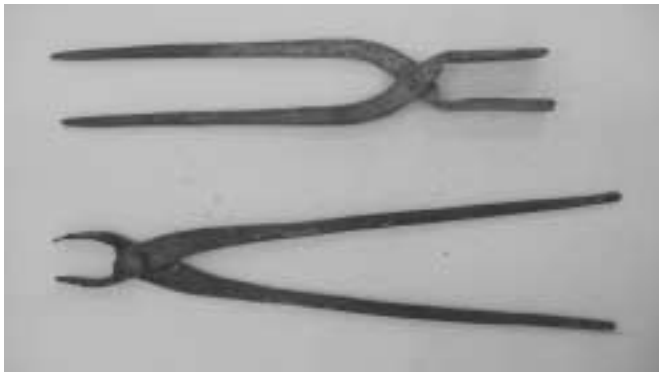
石鑿(のみ)　大村石材店所蔵

鑿(のみ)の頭を、金槌でたたくと鑿のとがった先が石を砕いていく。石工の作業の１日の始まりは、鑿の刃をつけることからだった。ふいごでおこした火に入れて、焼き、先端を槌でとがらせていく。刃をつけるのは、先輩の石工から順に行っていた。

新しい時代ものは、刃先に硬い金属がつけてある。

玄翁（玄能、げんのう）大村石材店所蔵

金槌、工程によって大きさの違うものを使用していた。



やっとこ　　大村石材店所蔵

鑿（のみ）に刃をつけるときに使用した。鑿を火に入れるときに鑿をつかむのに用いた。

八坂神社のかんざし灯籠

江戸時代の末に、八坂神社から程近い芝居小屋に美しいがどこか寂しいお茶子がいた。お茶子とは、観客にお茶や座布団を運んだり、時にはお酒の接待をした女性である。そのお茶子に浜問屋の若旦那が恋をした。若旦那の親は、身を飾るかんざしひとつとてない娘を嫁に迎えるなどもってのほかと、その恋を許さなかった。お茶子は井戸に身を投げ、八坂神社の大銀杏の下にあらわれ「かんざしをください」と悲しい声で訴える幽霊となった。そのあわれを慰めようと心あるひとびとがお金を出し合って奉納したものである。長い脚部に特徴がある灯篭。脚部には1827（文政10）年星次丁亥六月吉日　石工善三郎とある。

八坂神社の簪灯篭

山脇神社の猿

久保小学校の裏手に、ひっそりと神社が建っている。夏の風物詩、山王まつりのおおもと山脇神社（山王さん）である。御神体を護るのは阿吽の猿である。

山王さんの使いが猿であることから造られたものである。

守護獣の猿

妙宣寺の天邪鬼（あまのじゃく）

妙宣寺の墓地に、天邪鬼の墓石がある。大正時代の作といわれている。細部まで巧妙に手を加えられ天邪鬼の表情をよくとらえ、仕上げもよくできている。まさに尾道石工の傑作のひとつであろう。

墓石には生前従事していた職業や趣味に関わって造形された墓石も見受けられるが。天邪鬼とはいかなる思いがあったのか。

天邪鬼

艮神社（うしとら）の水盤の亀

ロープウェイ山麓駅の裏にある艮神社の水盤に水を注いでいるのは亀である。この亀の顔をみれば狛犬のような顔をしている。人に言わせれば亀らしい亀だそうである。水盤に水を注ぐのは龍が多く「龍の口」などと呼ばれている。亀は珍しい。